

豆の町（ビーンタウン）から

こんにちは（第7回）

会員家族 住井 円香

## ■大統領選挙後の学内風景

4年に1度のアメリカ大統領選挙が終わりました。8年前の11月、大統領選挙から一夜明けた米国の最高学府・ハーバード大学では、最後まで民主党のヒラリー・クリントン氏の勝利を信じて疑わず、現実を受け入れられない学生で溢れていたと聞きます。動揺を隠せなかったのは、教授陣も同じで、まるで喪に服すように、中には予定されていた試験を延期した教授もいたそうです。

さて、今回の大統領選挙でチャールズ川を挟んだ隣の大学の学生たちが、以前のような衝撃を受けたのか、どのような反応を示したかについて、私は詳しくは知りません。ただ、ドナルド・トランプ氏の当選確定を知った時、真つ先に頭によぎったのは、かつて耳にした前々回の大統領選挙のそのエピソードでした。そこで翌朝、自分がいるボストン大学の学生は果たしてどのような反応を見

せるのか、気になったのです。

ボストン大学の学生の多くも民主党支持者です。カマラ・ハリス氏をサポートすることを当然とする彼らは、ひよつとしたら8年前の大統領選挙のときと同じような絶望感から、シヨックを隠せないのではないかと思います。政治専攻の学生が多く受講する哲学の授業では、落胆した声が多く見受けられたものの、表立って取り乱すような学生は少なかったようで、若干ホッとしました。一方、昼過ぎまで選挙結果を知らず、クラスメイトにトランプ氏の再選を教えられて、「ええ、まじで!? 嘘だろ!?!」といったようにスラング交じりで驚いている学生もいました。全体的な雰囲気から感じたのは、前々回の大統領選挙でトランプ氏が生勝利した際のハーバード大学の学生について聞き及んでいる話よりは、かなり落ち着いた雰囲気のように思いました。ただ、もしかすると、今は政治の話をするヒートアップしていきそうなことをわかっているからこそ、敢えて感情を露わにするのを避けているという面もあるのかもしれない、そんなことも感じたりした学内風景でした。

## ■オンラインの発言は感情露わ

一方で、オンライン上では、激しい感情を露骨に示す人もいました。例えば、SNSのインスタグラムでは「トランプ氏に投票した人とは、今後、絶対仲良くできない」という強い表現で投稿をしている人が幾人かいたり、学内の掲示板では、今後4年間の社会に悲観的になって、大学側に特別なカウンセリングサービスの提供を望む、という書き込みまで見かけました。

いずれも極端な発言のようではあります。多くの若者にとってはまだアメリカの民主主義への信頼を大きく揺るがした2021年に起きた合衆国議会議事堂襲撃事件がトラウマとなっていたり、中絶政策など、今回の大統領選挙の争点となった部分、一体どのように変わるのかという見通しが立たず、先行きの不透明さに強い不安を抱いているようです。先述の哲学の授業の教授は、「樂觀的と言われるかもしれないけれど、一度トランプ氏の大統領時代を経験している。どうやって前を向いて結束を深めるかについては、ここ数年間でずっと学習してきているはずだから、きつと大丈夫だよ」と励

ますように、語り掛けていたことも印象に残りました。

■哲学で学ぶ主流派から外れた人たちの視点

大統領選挙の学生の反応からは少し話が外れますが、先ほどの哲学の授業について紹介したいと思えます。私が受けているのは、論理哲学を扱った授業で、論証が妥当であるための条件や、聴き手に語り手を信頼させる要素などを学習しています。ちょうど選挙期間中には、社会の中心から貧困や差別により疎外された、マージナライズド・グループ(Marginalized Group)にとつての現実を考えました。そのグループに属する人たちのことは、いわゆる社会の中心部や多数派となる主流派集団の人たちが目にする「現実の世界」には存在していません。そのため、主流派集団は、マージナライズド・グループのことが頭では理解はするけれど、響いてこないことがある、という学びです。

例として挙げたのは、黒人の人種差別を受けたと訴えても、アメリカで歴史的に主流派とされる白人の人たちにとって、自身が人種差別を味わうことがほとんどないた

め、人（主流派集団）によつては、人種差別そのものが存在しないように認識してしまう。そのため、差別されたという黒人の人の主張を心から信じていることができないことがある、といった考え方でした。

この概念に当てはめて、今回の大統領選挙をみると、民主党の支持層にも、共和党の支持層にも、どちらも種類の異なるマージナライズド・グループがあり、お互いにそれぞれが主張する苦しみが視野に入らないため、意見を真に理解できないという見方もできるのではないかとも思いました。

大統領選挙の争点でいうと、中絶の議論に戻せば、どの命も等しく大切に殺めてはならないという考え方は、宗教的・倫理的にももちろん正しいのですが、望まない妊娠という現実があることを見る必要がなく生きてきた人たちにとっては、直接的・間接的要因により中絶せざるを得なくなった人の様々な事情を汲み取りきれではないのではないか。安定した職業の人たちがシャンパングラスを片手に「移民の権利を保護しなければならぬ」と「正論」を述べたとしても、彼らは実際に職を失っ

た人たちの味わったことを経験していないのではないか。大統領選挙戦で解消できなかった、互いに理解し合えない、埋めきれなかったものは、開票前の大方の見方と異なっていた選挙結果に影響を与えたところもひよつとしたらあるかもしれません。

SNS上では上述した他にも、対立意見に対する嫌悪感のあまり、異なるポリシーを持った人を排除しようとする人が少なくありません。ただし、マージナライズド・グループの人たちは、「社会の主流である考え方はわかつていた上で、主流派が見逃している問題への視点を併せ持つている人たちである」ということも学びました。多様な国家、アメリカを發展させてきた大きな要因の一つに、これらの人々の視点があつたことは間違いありません。

私も授業を通し、留学生であることと、アメリカのマージナライズド・グループに属した視点を養っているようにも感じました。今回の大統領選挙については、綺麗ごとかもしれませんが、哲学の教授がおっしゃったようにこれからの4年間、異なる意見を持ったグループがお互い事情を鑑みて、対話が少しでも深まる

ことを期待していきたいと思つていきます。そして、私がアメリカの大学生活で得ることができた主流派集団の視点と、その集団に属しては見られない考え方を、将来日本で活かしたいという希望も持ちました。

## 楓之典君乳母草子

日々是猫日々 其ノ捌

猫の起源・進化

中條 恵子 陸自85

猫 不管黒猫白猫、能捉到老鼠就是好

猫 黒い猫でも白い猫でも鼠を捕るのが良い猫だー

鄧小平氏の言葉として知られていますが、その考え方は猫論（白猫黒猫論、黒猫白猫論）といい、清代の小説集『聊齋志異』（蒲松齡著）の「秀才驅怪」に関する評で、「黃狸黑狸、得鼠者雄」（黄色い猫でも黒い猫でも鼠を捕るのが優れている）と記されているのが初出とされています。

日本へは中国から伝来した猫様。初春を迎える此度は、猫様の起源・祖先と進化をご紹介いたします。